

# がんサバイバーに対する家族のサポートが 治療意欲及び心理的適応を促進するプロセス

○飯島誠（東京成徳大学大学院 心理学研究科） 石村郁夫（東京成徳大学大学院 心理学研究科）

キーワード：がん, 家族, QOL, セルフケア

## 目的

本研究では、がんサバイバーのQOLやセルフケアの向上において、家族のどのようなサポートが良い影響を与えるか明らかにする目的で面接調査を実施した。がんサバイバーが家族に求めるケアは繊細であり、これを質的に検討し、セルフケアの視点でがん体験をどのように乗り越えられたか明らかにすることは、有意義と考える。

## 方法

**質問紙構成** 面接対象者の選定を目的に、フェイスシート、上田・雄西（2016）のがんサバイバーの心理的適応尺度4因子18項目、がん体験に関する記述項目から成る質問紙を作成した。また、面接の対象選定を量的に担保する目的で、面接対象者に、柳澤・馬場・伊藤・小林・草川・河合・山幡・大平（2002）のソーシャルサポート尺度のうち、家族からのサポート項目2因子25項目、羽鳥・小玉（2012）の積極的困難受容尺度1因子7項目へ回答を求めた。

**質問紙配布** 関東圏内のがん患者会5組の代表者との直接面談にて調査概要を説明し、質問紙調査を依頼した。全体に210部配布し、回収率は47.62%、有効回答数は89名（男性の平均年齢：62.69歳、SD：10.37/女性の平均年齢：60.90歳、SD：8.50）であった。

**調査時期および調査対象者** 2017年8月から10月に質問紙調査を実施し、9月から11月に面接調査を実施した。香西・名越・南（2014）などの基準を参考に面接対象者を選定し、半構造化面接を実施した。対象者の内訳は、男性5名（平均年齢：60.4歳、SD：4.08）、女性8名（平均年齢：60.88歳、SD：7.42）であった。面接調査ではインタビューガイドを作成した。治療に取り組む原動力が何だったか、家族に対する思いや家族のかかわりが治療に取り組む上でどのような意味があったかなどを、主な項目として設定した。

**倫理的配慮** フェイスシートから病態の重篤さや再発・転移、精神疾患が疑われる対象者の除外を行った。また、研究の性質上、参加者が心理的負担を感じる可能性を考慮し、代表者と相談センターなどの援助資源について話し合った。対象者に同意を得る際、研究意図、個人情報及びデータを厳重に管理し、研究以外の目的で使わないこと、研究への参加は自由意志で、いつでも中止・拒否が可能なこと、データ収集における録音・逐語について同意を求めた。なお、本研究は筆者の所属する東京成徳大学大学院の倫理委員会による承認を得ている（承認番号17-1-2）。

**利益相反開示** 利益相反に相当する事項はない。

## 結果

木下（2007）の修正版グランデッドセオリーアプローチ（M-GTA）

を用いた分析の結果、35の概念、10のカテゴリー、4のカテゴリー・グループが生成された。以下のプロセス概要では、概念を【】、カテゴリーを《》、カテゴリー・グループを◇として示す。

がんサバイバーは《がんに伴う不安を抱える体験》により、不安を解消しようとする。具体的には【正しい知識を得て治療に取り組む】といった《適切な治療への取り組み》によって、《心身の安定》を獲得する。これらを促進する要因として、《家族からのサポート》が影響を及ぼしていると考えられる。特に《家族の情緒的なサポート》の【思いやりを持って家族が接してくれる】や、《家族の手段的なサポート》の【家族が違う視点で見られる】などは、《安定した治療生活》に直接影響を及ぼしている具体例も見られ、がん治療における重要性が窺える。また、《家族と共に生きるための治療意欲》は、治療に取り組む上での大きな原動力になっている。

## 考察

本研究において家族からのサポートは、情緒的サポートと行動的サポートの2つに大別された。《家族の情緒的サポート》では、がんサバイバーを思い、家族が寄り添う、言葉をかけるといった関わりが、QOLやセルフケア行動の向上にも貢献していると考えられる。黄・兒玉（2014）は、情緒的なソーシャルサポートを多く受けられると、がんを体験している自己の肯定的変化をより多く認知するとした。このように、家族全体における情緒的な関わりや思いやりを持った接し方が、がんサバイバーの治療意欲やQOLの促進に影響を及ぼすと考えられる。また、【スキンシップを通して気持ちが伝わる】というサポートの影響も示された。山本・前田（2014）は、がん患者に対するタッチ療法の有用性を検討し、主観的効果において症状の緩和、快適さ、リラックス効果を感じる事が示されている。このように、場合によっては言葉かけ以上に、家族が体に触れることは精神的なケアになり得ると考えられる。

一方、《家族の行動的サポート》では、日常生活へのサポートが見られた。白田・吉村・前田（2006）などは、がんサバイバーが生活上の様々な支障を来しており、それになんとか対処をしている姿が示されていた。本研究の事例で“基本的のがんを抱えて共に生きるってことは、子育て、介護、仕事、もろもろのことを抱えて生きていくことだと思うんです”との語りが見られた。このように、がんサバイバーにとって食生活などの日常的なサポートは基本的サポートの1つであり、もし家族がサポートの仕方に困惑しているならば、まずは日常的なサポートが手掛かりになると考えられる。

IJIMA Makoto, ISHIMURA Ikuo